

『今日、おとうとができました。』

著：恵庭

ill：羽純ハナ

春の始まり

高井と再会したのは、久しぶりに登校した日だった。俺は黒く染めたばかりの髪が気になり、指先でいじりながら煙草を吸える場所を探して、校舎の裏を歩いていた。

朝一から体育。試験のある教科と違って体育と音楽は出席しないと進級できない。それは一年の時に学んだ。だから登校したはずなのだが、朝からの体育はとても気が重かった。

グラウンドからクラスメイトのサッカーをする声が聞こえてくる。体育館なら誰も来ないかと思い、煙草を取り出しながら歩いていると、曲がり角を曲がったところで女の声がした。

ぎょっとして足を止めたのは、煙草を見られる心配よりも担任教師の声だったからだ。

「どうしたの。セックスしたことないの？」

発情期の動物の声。それくらいには学校にそぐわない声だったので、思わず煙草を落としてしまった。声は保健室から聞こえてきた。校舎の隅にある保健室の裏は、ときどき煙草を吸いに來ることがあったが、もうここを通るのはやめよう。

「じゃあ先生が初めてなんだ。緊張しないでいいわよ。わたしが全部やってあげるから」
安いAVでもこんな誘い方はしないだろうと、嫌な汗が吹き出た。

「高井君だったら許してあげる」

高井といえば俺はひとりしか知らなかったの、つい顔を思い浮かべてしまった。高井は一年の時から目立つ存在だった。父親が有名な恋愛小説家で、母親がテレビのコメンテーターもしている弁護士だというのも目立つ一因で、サインを欲しがる生徒に囲まれているのを見たことがあった。

生徒会の副会長で、でも真面目とは程遠くて、天然と言われるくらいに馬鹿だ。

二年に進級したばかりのざわつく教室で、俺の後ろの席には誰もいなかった。教室で空いている席はそこだけで、教師が「高井はどうした？」と言った。知りませーん、とか、下駄箱のところで会わなかった？とかいう情報が飛び交ったけれど、結局そのままになった。

新しい教科書だけが、空いている机の上に次々と積まれていた。

始業式の最中、三年生の列に高井がいる、とクラスメイトが騒ぎ出した。教師に引きずられて戻ってきた高井は、「どうりで知り合いが誰もいないと思ったー」と頭をかいていた。俺はその後のHRをサボったが、きっとその話で盛りあがったんだろう、高井は間違いなく学校一の馬鹿だった。馬鹿でも教師からは嫌われない、得な性格をしていた。

そして、運動部に属していないのに校外の練習試合に駆り出されるほどスポーツが得意な、健康優良児。その得意の体育の授業をさぼって、保健室で担任教師とAVまがいなことをするなんて、あまりに彼らしくない。

「先生」

かすれた声が聞こえた。保健室の窓にかけられた白いカーテンに人影が映った。頭と肩とおぼしき線が、カーテン越しにガラス窓に押しつけられる。ドン、と音がするくらいの勢いだったので、驚いて窓を見る。

「い……って」

聞いたことのある声だった。やっぱり高井だ。

「先生、やめ」

もももどとあとが聞き取れないけど、女の声がそれにかぶさって「おとなしくしてなさい」と言った。

「あーくそ、力でねえ」

緊張感をぶちこわす声が合図になって俺はこぶしを窓に叩きつけた。

すごい音がした。ビリビリとするガラスの向こうで、人の気配が大きく動く。確かめるように、カーテン越しにてのひらがガラスに押し当てられて、それが拒否じゃないとわかったのでつい「高井！」と叫んでいた。

バタバタと、保健室から慌てて出ていく足音とともに窓が開いた。

窓の向こうはカーテンに区切られたベッドで、高井がぼんやりと俺を見つめ返していた。

「助かったー」

眉を下げてへらりと「やばいところ見られちゃった」と笑った。

全然やばくない口調に思い切り冷めた目で見ると、高井はちょっと首をかしげて俺の視線の先に目を落とす。シャツのボタンもズボンのベルトも途中まで外されている。

「ボタン飛んでるじゃん。あーもう、今日来なきゃよかった。だりい」

倒れ込むようにベッドに横たわる。声は熱がこもっているように鼻にかかっていたし、息が白く見えた。

「熱、あるのか？」

「ああ、えっと、ただの風邪だし寝てれば大丈夫だから」

「保健医は？」

「出張だって。そいで先生がここまで付き添いしてくれてたんだけど」と、先程の出来事を思い出したのか目を泳がせた。

「助けてくれてありがとうな」

「助けたわけじゃねえし。学校でいちゃつくなよ」

いちゃついてたわけじゃなくて襲われてたと言えはいいのに、高井は小さくあははと笑うだけだった。言い返す力もないのかもしれない。ちらりと見ると、顔の上に腕をのせて息を吐いている。

俺は両手で窓枠をつかんでよじ登り、高井の身体を飛び越えてベッドの反対側に降りると、薬瓶の並んだ棚に近づいた。

適当に引き出しを開けると風邪薬があった。棚にしまわれたグラスを取り出すと小さな洗面台から水道水をそそいでベッドに近づいた。

「薬飲めば？」

高井はもう半分眠っていたのか、寝ぼけ眼で俺を見た。

あんなことがあったのに随分のんきだ。仕方ないので薬をグラスと一緒に渡してやる。高井は身体を起こして、それからおぼつかない手元で錠剤を取り出して飲み込んだ。

出ていこうとすると「あ、待って！」と呼び止められる。

「ごめん、もうちょっとここにいて」

「はあ!?!」

「や、ええと、先生戻ってくるかもしれないじゃん。俺寝ちゃうしおまえもいなくなったらまたふたりきりだし、怖いし」

思い切り顔をしかめたのに、高井は少しだけ目を輝かせている。熱で潤んでいるだけかもしれない。汗のせいか顔は上気してて赤いし、大きな声を出したからかさっきよりもさらに鼻声になっている。

同じ年の男でも少しだけ可哀想になる。さっきの「先生やめて」は俺も怯えたので気持ちはわからなくもないのが悔しい。でも高校生男子が怖いから一緒にいてって、ない。

起きてるのもつらそうなのに、高井はこちらをじっと見ている。捨て犬みたいだ。

雨に濡れた可哀想な捨て犬。そんなの大半に見捨てられてるはずなのに、人間だとびっくりするくらい哀れっぽくて、見捨てるのが悪いような気分になった。

こいつほんと苦労しない人生だろうなと思った。高井は俺が動かなかったから安心したのか、またにこっと笑ってベッドに横になった。

「なあ、名前なんて言うの？ 二年？」

「.....渋谷」

へえ、と高井がため息みたいに小さい声を出した。

「俺の前の席のやつも渋谷っていうんだよ。喧嘩早くてキレやすい金髪の不良だって。でも俺、同じクラスなのにしゃべったこともないんだけど」

違う、一日だけ会ったことあるよ。とは、みじめなので言わなかった。

「おまえと違うね。渋谷はすげえ優しい」

高井はまだぼんやりと話を続けようとしていたが、「寝たら？」と俺が言うと素直にまぶたを閉じた。

「俺、高井っていうの。ありがとー」

知ってるよ、と心の中でだけ返事をした。

クラスメイトが高井を見舞いに来るまで俺は保健室で高井を見守った。その間、男子高校生好きの女教師も怪我をした他の生徒も来なくて、校舎のはしっこの保健室はとても静かだった。

そのまま二ヶ月ぶりの教室に行くと、なんであいつ来てるのみたいな声がひそひそと聞こえてきた。刑務所じゃなかったの？ という声も聞こえてきたけれど気にせず席に着いた。

机に入れっぱなしだった教科書はそのままあったので、買い直す金のない俺は安堵した。

俺に関する噂はひどい。喧嘩・恐喝・実の父親を殴った・刺し殺そうとした。当たっているのは最初と最後だけだけれど、それでも進学校といわれる学校に通う無害な高校生たちが俺を避ける理由にはなった。

空いている後ろの席を見て、春の初めの出来事を思い出した。

二年に進級した始業式の日、まだ俺の頭は金髪だった。家に帰ると親父は酔っ払って寝ていた。それはいつものことだったので、とぼっちりをくらわないようにそっと財布だけを持って家から出た。

同じ学校の生徒と出会ったのはその夜だった。日が暮れたコンビニの前で高校生の集団とすれ違った。盛り上がってしゃべっていたそのうちのひとりが少しよろめいて、俺の肩にぶつかってきた。

びっくりしたのは俺よりも相手だった。同じ制服を着ている気やすさで俺を見て、それから金髪を見て、ついで消えろという気持ちに乗せたまなざしに気付いて顔色を変えた。

「あ、すみません」

肩を払うと謝罪を無視して通り過ぎようとした。ぱきんと足元でなにかが割れる音がした。相手が「あっ」と悲鳴を上げた。

足の下眼鏡はぶつかった相手のものだった。彼は俺を見た。たぶん俺がひよろりとしていて、自分には仲間もいると小ずるく判断したのだろう。このまま引っこんでは恥ずかしいとも思ったかもしれない。

彼が俺を突き飛ばそうとした時には、つい殴ってしまっていた。体育会系の体格のいい友人も、ほおを押さえてうずくまっている。ひとは逃げて、ひとは逃げそびれて悲鳴を上げた。

胸倉をつかみ上げて反対の手で殴ろうとしたら、手首をつかまれた。背後に立った男が、俺の腕をひねり上げた。無理に動かすと肩の骨が外れそうに痛い。

「先輩たち何やってんですか」

胸倉をつかまれた相手は「あ」と哀れっぽい声を上げて、救いの女神にすがりついた。

「た、助けてくれ高井」

俺は、高井だ、と驚いた。今日、同じクラスになった高井は、俺にまったく気づいていなかった。高井は関節技を決めたのと同じようにするりと俺の腕を解放した。

「このひとになんかしたの？」

「見ればわかるだろ!?! ちょっとぶつかっただけで因縁つけられたんだ」

先輩と呼ばれた男はきいきいと騒いだが、高井はちらりと俺を見て「でも四対一でしょ。どっちが悪いの？」と尋ねた。のんきな口調とは違って、意志の強そうな目をしていた。

「そいつに決まってるだろ！」

「先輩はちょっと黙ってて」

倒れている男の身体の下に腕を差し込んでひょいと起こす。

「先輩、どっちが悪いんですか？あ、気絶してた」

殴られた鼻を押さえていた男が、「あいつにぶつかって」と言うと、じゃあ先輩たちが悪いんですよ」と最後まで聞かずに断言した。

それから、すみませんでした、と俺に向かって頭を下げた。騒がしい先輩は目を白黒させていたが、俺は「おまえにぶつかられたわけじゃねえけど」と食い下がる。

「こっちがきっかけを作ったのは謝るけど、殴ったのはやりすぎじゃない？」

悪びれずちらりと俺の顔色を窺った。体格はいいけれど屈強というほどではないのに、威圧感を感じて居心地が悪い。高井が俺の見た目や態度にまったく怯んでいないせいで気づいてさらに気分が悪くなる。

「許してもらえます？」

馬鹿じゃねえの、と呟いてブレザーから手を離した。その場を後にすると背後からは「話のわかるひと

で良かったですね。先輩たちも俺を巻き込むの止めてくださいね。まじでむかつきます」とのんびりした説教が聞こえた。

彼らから離れてしばらく行ったところで、俺は止めていた息を吐いた。こんなところで高井に会うとは思っていなかった。

美人弁護士の母親と、俳優みたいと騒がれる小説家の父親がいると聞いていたから、本人もさぞかし美形なのだろうと思っていたけれど、初めて間近で見たら拍子抜けするくらいに普通の男の顔をしていた。

それなのに、急にあらわれたあの一瞬だけ、とても綺麗だと思った。自分と同年代の男とは思えなかった。運動神経のよさそうな身体つきや、ふざけた話し方をしても相手を真っ直ぐに見る、動物みたいに黒目がちな瞳のせいだったのかもしれない。

あんなにタイミングのいいヒーローみたいな人間がいるんだな、と感心した。俺だったら絶対に、面倒ごとに自分から頭を突っ込んだりしない。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>